短歌

木村光子
小西久二郎
宮本照男
選

特選

カート押しスーパー買い物ゆるゆるに
妻の背中見つ互いの齢

彦富町　池田光雄

（評）カートを押してスーパーでの買物は、ゆっくりとしている妻の背中を見つめている。お互いに齢をとったなあという。老老介護の心のよく出ている作品で、身に沁みてくる。

特選

御殿びな施設へ贈りたるという
母屋の座敷ひろびろ寒し

東近江市　田附孝子

（評）旧家の一つの矜持でもあった御殿雛を施設に贈った時の寂寥感。家人の万感が「ひろびろ寒し」によく託されている。躊躇や逡巡の欠片さえ詠まず、時流のままにの潔さを生きる家族の決断、心根を聴くかの作品に立ち上げられた。

特選

転びてすぐ立ち上がる二歳児の
掌ほどの靴やわらかし

正法寺町　髙井豊

（評）幼児の手の平の把握と靴の皮膚感覚がとてもマッチして二歳児の可愛らしさが巧みに表現されています。素材と表現力に作者の独創性を感じます。

入選

いたわるる母となりても子を思う
寒くはないかひもじくないかと

高宮町　細田惠貢子

（評）老いていたわられる母になった私だが、子を思う心は変わらない。寒くはないか、腹がすいていないかと。いくつになっても母は母である。下句の表現が効果的だ。

入選

疲れたあー旨かったあーの呟きに
君のうふふでひと日の終わる

堀町　河分武士

（評）一日働いて「疲れたあ」、夕食を食べて「旨かったあ」と言い、君の「うふふ」の笑いでひと日が終ったという。幸せそうな情景を具体的に表現していて共感を呼ぶ。

入選

梅の花今年もりんと咲きにけり
空き家となりぬ親元の庭

田附町　西田享子

（評）梅の花が凛と咲いた。空き家となった親元の庭にという。両親もおられないのだろうが梅の花が咲く。その花を見るたびに、親元にいた頃が思い出されるのであろう。

入選

香ばしくアップルパイの焼きあがり
ちょっとオシャレな午後のひととき

長浜市　樋口満智子

（評）食事の賄いとは微妙にニュアンスの差があるケーキ作り。アップルパイの出来あがる頃合の気分を「ちょっとおしゃれな」と表現、どこかに自分を褒めてやりたい気分が漂うような作風です。

入選

静かなる待合室に盛り上がる
二人の手話の二十指豊かに

日夏町　寺村享子

（評）「声」に代わる手話で意志の疎通をはかる二人を温かい目線で見守る待合室の空気を感じさせる歌である。現代社会の一点景、手話に心を通じ合う若者を正視する眼である。

入選

蕗の薹夫の好みの蕗味噌と
土より覗く春の色摘む

犬上郡豊郷町　森典子

（評）春の色摘む…の結句が一首を高めています。夫の好物の独特の歯ごたえ、舌ざわり香りの蕗味噌を作れる心の内を下句のオリジナルな表現が読者にも届いてくるよう。

入選

青々と息吹く緑を孕み居て
ビニールハウスを出でる日近し

稲里町　野瀬善一

（評）ハウス内での生育栽培が順調にすすみ、出荷が間近な生育の経過と心象を「孕み居て」と把握する視点が特徴的かつ気分の良さを巧みに表現、農業に生きる心意気が伝わります。

佳作

愛おしむゴルフクラブと訣別す
息子に宅配一二八〇円

米原市　西尾辰之

佳作

年賀状ことし最後としるす友
余白もうむる文字にあふるる

西今町　久永朝子

佳作

過疎の駅幾つも過ぎて往く旅は
心支度のひとつとならん

東近江市　小林清次郎

佳作

夏の夜に余計なことを言いそうで
背をむけたままコップを洗う

芹川町　日比野美鈴

佳作

針金に強いられ形整えて
盆栽梅の哀しき美かな

本庄町　田口洋子

佳作

耕さぬ畑雑草に荒れしまゝ
水仙ひときわ陣取りて咲く

下西川町　北川和子

佳作

納屋すみに白き芽を出す馬鈴薯に
未だ寒しも草取りにゆく

犬上郡甲良町　村岸千鶴子

佳作

まだ生きる気持ちなくとも取り敢えず
治療されいる大口開いて

松原町　岡田麻耶

佳作

幾年の重さに耐えにし押葉かも
母の日記の間より落つ

米原市　日比陽子

佳作

「グッバイ」と拳突き上げペダル漕ぐ
君が背まぶし夕焼ロード

馬場二丁目　清水はる

佳作

帰省せし息子二人が母さんの
入れぬ話題で酒酌み交わす

開出今町　掛田洋子

佳作

どれくらい多くの物へサヨナラを
言えばすべてが終るのだろう

外町　筑田豊子

佳作

別れ際かけたる言葉届きしか
挙手高くして子は駅舎へと

古沢町　大橋しず

佳作

麻痺の手に笛は無理ゆゑ幼き日
母に習ひしハーモニカ吹く

犬上郡豊郷町　田中マサ子

佳作

直弼の「柳廼四附」和歌集を
二〇年かけ市民解読

地蔵町　佐古徳子

佳作

「明日は晴れ」予報聞きつつ微笑んで
旅の鞄の二度目のチェック

鳥居本町　寺村美恵

佳作

切字「や」を関西弁やと言う子らに
授業はすすむ指を折りつつ

東近江市　坂口靖子

佳作

ひと月ぶりようやく退院せる妻の
軽快に米研ぐを聴きいる

長浜市　近藤甚一郎

佳作

「法師」とう日本最古の旅籠にて
爺さん五人雑魚寝たのしき

近江八幡市　浅野忍

佳作

アスパラの淡き緑の皮をそぎ
陽ざしも掬いて夕げのスープ

平田町　曽我伸子

佳作

雪残る霊仙岳の福寿草を
撮り来てサロンに友見せくるる

犬上郡多賀町　木村正子

佳作

カルテ見て医師にこやかに祝ぎくるる
確かに今日は吾が誕生日

西今町　松本トシ子

佳作

田畑を愛した父の鋤や鍬
錆びて朽ちしを捨てられずおり

東近江市　平田三栄子

佳作

夜の明けの風なき琵琶湖にポンポン船
かるき音たて春漁始める

八坂町　真田さかえ

佳作

戦なき平成終わりぬ叔父二人
幼さとどめて遺影に掲ぐ

日夏町　成宮恵津子

佳作

隣り合ふ熟女の秋波もたわい無し
指萎えたると蓋開けを請ふ

小泉町　磯　史郎

佳作

四月待つキャンパス内の図書館に
一人書(ふみ)読むラクロス乙女

野瀬町　中山敬一

佳作

水涸れの流れ失せたる浅き瀬を
跳ねて哀しき鮎の終焉

芹橋二丁目　古池陽彦

《総評》

応募者総数は七十二名。応募首数は二百十三首はひとりひとりの詩魂から濾過された感性の結晶であると自覚し、対峙した。

一首一首に托された意思、長年の経験と勘、何よりも詠む意欲を思えば二百余首を構成する集団の詠む意欲を汲むに専念する緊張感の連続でもありました。

しかし、作品を繙けばこの緊張感を瓦解するかの危惧なしとせぬ展開もあり、一首一首に托された「感動の核」の行方を危ぶむこともあり、立ち止まり、息に息を次ぐ選歌でありました。

・一首に托された眼目は全うか。
・詠み手の独自性が生きているか。
・歌うことによって訴えられているか。
・正しい国語表現が生かされているか。
・使い古された常套用語からの脱出。
・辞書、辞典による再度の確認が成されたか。

等々が挙げられる。

短詩型とは言え三十一文字の世界に「私」を投入し「今を生きる私の歌」に立ち上げられているかが問われます。

〈よく見、よく聴き、感じる心〉の原点に立ち返ることに尽きます。

時代をリードする作品に触れる＝鑑賞の力を養うことも大切でしょう。更には研鑽の場を広げ、実践、学びの場の絆を大切にする等、いよいよの一歩を期待します。

木村　光子

本年度短歌部門は七名であるが増えて七十二名となってうれしい。然し、それに対して先般発行された『ひこね子ども文芸作品入選集』を見て驚いた。短歌の応募者の中学生が何と六〇六名もある。このままずっと続けて短歌を作ってくれれば、これほどうれしいことはない。今後を見守ってゆきたい。

さて、応募作品を再三読みかえしたが、ふかい感をよぶものや心に沁みる作品は少なかった。高齢により意欲が低くなったためだろうか。私の結社では、毎年三十首詠を募集している。三十首出詠するのには最低五十首は作らなくてはなるまい。五首や十首ではなく、そのための意欲と努力が必要である。どうかこの意味で自己の心身を傾注して作ってほしいと切に願うのみである。

小西　久二郎

作品は充分に練って投稿されることが大切です。「よい歌の条件とは」を考え、次の文章をご紹介させていただきます。

無条件で「これは、いいな」と思う歌に出会うことは、そういつでもあるわけではありません。いい、わるい、は結局は比較の問題であります。相対的といってもいいので、たとえばその十首の中では「これが、いい」ということなのです。

私は、自分の作品の出来ばえといったものについても、つねに謙虚でありたいと思っています。第一、そう自信など持てるものではありません。「よい歌」を作ろうとは努力はいたします。しかし、出来上がったものには、いつもがっかりしています。気持ちよくできたな、と思ってもう一度見直すと、アラばかり目につきます。

（岡井　隆・短歌春秋）

宮本　照男

選者吟

黒土に球根埋むるは秘儀めける
久しかりし土の感触の朝

木村　光子

九十になりたるわれの進路とは
夜々に質（ただ）すも答出で来ず

小西久二郎

夕暮れの埋木舎は閉ざされて
足音もなく闇の匂いす

宮本　照男